

個人指導による英語リスニング力向上の効率化—
簡略記号を用いた視覚的アプローチ
The Practice of a Short-term, One-on-one Training for
Developing English Listening Skills

阿佐美 敦 子
Asami Atsuko

Abstract

In 2007, I published a paper which described how I had taught the various patterns of English sounds to three different groups of Japanese English learners, using three simplified symbols which represent what different speech sounds are made, with the results that all three groups had made progress. Through the training, it became less difficult for them to catch every English word in short sentences which had sounded one long words to them before they received the training.

In this paper, I describe a more efficient impact of a short-term, one-on-one training for developing English listening skills conducted in 2007, 2008, 2009. Applying the same visual approach to natural speed English, the one-on-one training produced better results in a shorter period of time in comparison with the group training, which was helpful to save participants' time and therefore, to encourage them to be more motivated and more willing to learn.

Giving individual training to participants makes it clear that what types of problems each has and that their workload is lightened.

はじめに

筆者は、効率良くリスニングの力を向上させるためにいかに学ばよいかとの疑問に、大量に英語を耳に浴びせる「多聴」と併せて、一つ一つの音、一つ一つの音変化に耳を傾ける「精聴」に着目し、2003年、2004年、2005年と3種類の異なるグループを対象に指導を実践した。体験学習者としての年齢を過ぎている学習者に、ネイ

ティブ・スピーカーが当たり前に発する英語の音の一連の基本原則，すなわち音の連結・脱落・縮約・弱化・同化・異化・割込み・強弱・強勢等を平易な言葉で解説し，学習者の理解を助けるためにそれらを簡略に表す3種類の記号を用いて，学習者の視覚に訴えるものである。英語の音及び発話時における聞こえ方を理解することを目標におこなった指導法は，指導前後のリスニング・テスト結果，アンケート調査結果の双方から，ナチュラルスピードによる強弱アクセント・音変化を3種類に簡略に分類し，記号化して視覚的に理解させようとする試みとして，これらの実施グループに関する限り一定の成果を上げることができた。

本研究は前研究における指導法に新たな改良を加え，2007年，2008年，2009年の3ヶ年にわたりおこなったものである。前研究では10名から26名の対象者に対して指導者一人，すなわちグループ指導であったが，対象者にとってより効率良く，つまり短時間でリスニング力を向上できる工夫を考慮し，指導者が一人の対象者に注意を注ぐことのできる個人指導の形態を実践し，それぞれの実施グループが前研究に勝る結果を残すにいたった。本稿ではその指導法，有効性について述べる。

I 目的

クラス規模や授業時間数等の制約を受けながら理想的な英語教育を行なうには，大きな困難が伴う。習得に長い時間を要し，また既に習得したスキルの保持のためだけでも継続的学習が欠かせない英語学習の性格上，非常に限られた時間しか割り与えられない一般的教育現場において，文部科学省の掲げた目標の達成は難しいと言える。中・高・大と一般的学習態度で英語と接してきた学習者には，英語による情報のインプットもアウトプットも大変に不足しており，英語とは言語間距離が開いた日本語を母国語とする学習者が英語を習得するに足る量には程遠い。リスニング力を養うためにも，相応の語彙力を身に付け，大量の英語表現に触れ，日本語に変換することなく意味単位で聞き取る訓練を積み，かつネイティブ・スピーカーがナチュラルスピードで発する音をつながりのなかで理解できるようにならねばならない。一方で，次節以降で示すアンケート調査結果からも明らかなように，学習者の多くはリスニングに関して質的にも量的にも十分な学習をしてきているとは言い難い。これでは，学習者の期待に反して英語習得への道は遠いといえる。

本研究は，慌ただしい日常生活のなかで英語学習のために多くの時間を割くことができない一般的学習者が，より高い英語力を目指す動機付けとなり得る程度の満足度の高い成果を，彼らが学習意欲を高く保持できる程度の短期間で上げることを目的とする。「アクセント記号」「リンキング記号」「リデュース記号」によってナチュラルスピードでの英語の音の聞こえ方を3種類に分類し，対象者が各母音・子音を正確に認

識し、音変化を視覚的に理解したところで、対象者は指導者の助けを借りながら、ネイティブスピーカーの発音に合わせて教材を繰り返し発音するよう促される。短い指導時間ではあるが、次回指導まで定められた自習時間を設けることで目標とする発音レベルの到達を目指す。自身の発音がネイティブスピーカーのそれに近づけば、耳にした英語を似てはいても実は異なる日本語音に置き換えるという長年のカタカナ英語習慣から脱却し、リスニング力向上を図ることが可能であろうという仮説が考えられる。

II 方法

1. 調査対象者

各調査とも、実践女子大学人間社会学部人間社会学科所属学生のうち、「リスニング力向上訓練」に参加を希望した学生12名（計36名）である。

2. 調査実施期間

2007年4月～7月、2008年4月～7月、2009年4月～7月において、各自週1回、15分指導×10回（計150分）に加え、1日につき15分の復習を課した。

3. 使用教材

2007年：アンディ・テナント監督作品

「最後の恋のはじめ方」（2005年制作、アメリカ映画）
（ソニー・ピクチャーズ エンターテインメント）

2008年：ドナルド・ペトリ監督作品

「10日間で男を上手にフル方法」（2002年制作、アメリカ映画）
（パラマウント ホーム・エンターテインメント ジャパン）

2009年：スティーブ・パーセル監督作品

「ラブ・イン・ローマ」（2002年、アメリカ映画）
（ワーナー・ホーム・ビデオ）

これら映画3作品の場面から、毎回、後述する分量の会話（時間にして1分程度のシーン）を抜き出し、簡略記号を記入し、それに合わせた発音練習を展開する。リスニング学習に好意的感情が向けられ、英語学習全体について肯定的、積極的態度が持続されることは、継続的自学習を必要とする語学学習にとって欠かせない要素である。その点、映画という視覚および聴覚への心地よい刺激、娯楽的サポートが対象者のモチベーション維持、さらなる向上につながると考え、特に作品の選定にあたっては、対象者の希望を取り入れ、コミカルな仕上がりであることを条件とした。個人指導の

開始に先立って対象者全員が当該作品の視聴をおこない、作品全体の把握を指導の前提とした。

4. プレテストおよびヒアリングの実施

対象者は、ナチュラルスピードで発せられる際に起きる強弱アクセント・音変化を含む、比較的平易な、すなわち対象者にとって既知と思われる数個の単語から成る、実用的意味を有する下記の20文を、それぞれ3回ずつナチュラルスピードで聞き取り、解答用紙に英語で記入する形式のプレテストを受ける。これらは前研究の際に用いたものと同様である。

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| ① Cut it out, please. | ⑪ I brought your letter here. |
| ② I wasn't around then. | ⑫ We'e got to get out of here. |
| ③ I could have had it. | ⑬ You really mean that? |
| ④ What do you mean by that? | ⑭ You would have made it. |
| ⑤ I'm going to miss you all. | ⑮ It won't work out. |
| ⑥ Take it or leave it. | ⑯ Give me a call anytime. |
| ⑦ You can keep it if you like. | ⑰ Can I get you something? |
| ⑧ How about a cup of coffee? | ⑱ You want a drink or something? |
| ⑨ Will you get him on the phone? | ⑲ Paul is as old as Anne. |
| ⑩ You've got a beautiful garden. | ⑳ Just hang in there. |

プレテスト終了後、各グループともグループ・ヒアリング形式で自由な感想および抱負等を聞き取る。

5. 母音・子音の再認識

約1時間を対象者全員で英語の各母音・子音の正確な、すなわち日本語の影響を受けない音を再認識する作業をおこなう。dog, cats といった平易な単語を用い、それらが「ドッグ」や「キャッツ」ではないことを認識し、カタカナ発音からの脱却の第一歩とする。このとき、[æ] ⇔ [e], [e] ⇔ [i], [i] ⇔ [i:], [ŋ] ⇔ [g] のような一般に日本人学習者にとって誤りやすい音の違いについて解説し、対象者は指導者を真似て発音を繰り返す。

6. 映画スクリプトを用いた発音個人指導

ここより計10回の個人指導の開始となる。比較的平易な日常的英語表現で構成される会話文（およそ200words程度、1分前後のもの）を、前述の映画スクリプトより抜き出したものを対象者に提示する。これには全文にわたって一般学習者のリスニング力向上に必要と考えられる範囲の、つまり英語のプロフェッショナルを目指す学習

者ではなく、後述のアンケート調査結果でも示されるように日常会話に困らない程度の英語力習得を目標とする学習者に必要と考えられる範囲の、ナチュラルスピードによる強勢・音変化を表す3種類の簡略化された記号（アクセント記号、リンキング記号、リデュース記号）が既に記入されている。

スクリプトの一例として、2009年実施の調査に用いた個人指導4回目のスクリプトを示す。

When in Rome # 4

“There are some spectácular shóts. My cámera is going to be conténtǎ hánging with Hámmond.”

“You know, unemplóymēt is nóǎ that bád.”

“ÓK, the sētup is níce, but I dó want my jób bák.”

“Oh, só do I. You know, áfter ábout thrée, fóur more wéeks of this.”

“Chárlie.”

“ÓK. Fóur dáys of this... thrée days.”

“You know I think the réason we’re hére is, Hámmond has a thíng for you.”

“Uh, nó. Mr. Hámmond ánd I wórċ together. There is nó thíng.”

“ÓK.”

“So Chárlie, bú you think you’ll éver talk to Páolo again?”

“That wás a gréat change of súbjeċt. You know I don’t think that Páolo and I would háve éver really góttēn álong. You know, he thinks I’m án úptight Américan, ánd I think he’s á wáy too láid-back Itálian.”

“Like óil ánd vínegar.”

“Yéah, they mighċ nóċ mix real well, bú you pút them on á sálad, ánd it turns out to be á gréat combinátiōn.”

- ・アクセント記号 ‘ ` ’ →文中、強勢のある母音の上部に記入する。この記号のついた母音は強く長めに発音され、それ以外の母音は弱音、すなわち弱く短めに発音されるか、まったく発音されないこともある。
- ・リンキング記号 ‘ ˘ ’ →文中、前の単語の最後の音と、後ろの単語の最初の音がつながって、それぞれの音とは違う音に変わる箇所下部に記入する。
- ・リデュース記号 ‘ / ’ →文中、前または後ろの音に影響されて、発音されないか、

あるいはほとんど聞こえないくらい弱く発音される箇所に重ねて記入する。

まず、対象者にとって未知と思われる英語表現を意味のかたまりごとに日本語で説明し、内容の理解を得たうえで、映画の当該シーンを再生し、スクリプトのリスニングをおこなう。この際、対象者にはこれらの記号を目で追いながら、いかに音変化がなされるかを意識して精聴するよう指導する。英語の音声的性格を聴覚だけでなく視覚をも駆使し、一つ一つの音、一つ一つの音変化に耳を傾ける精聴を試み、すべての音を理解していくことが狙いである。

次に、指導者がナチュラルスピードにおける音変化を、意味をなす節ごとに区切りながら比較的ゆっくりと再現し、続けて対象者が同様に発音する。これを繰り返したのち、さらには指導者と対象者が同時にスクリプトを発音する。

次回指導までの一週間、スクリプトを見ながら音変化を再確認し、毎日最低15分の発音練習をおこなうこととする。

7. ポストテストおよびアンケート調査、グループヒアリングの実施

全10回（計150分）の個人指導終了後、対象者は初回のプレテストと同様のポストテストを受け、また指導方法に関するアンケートに記入する。その後、グループヒアリングをおこない、自由な感想等を聴取する。

Ⅲ 結果

1. 2007年度におけるプレテスト、ポストテスト結果

プレテスト結果

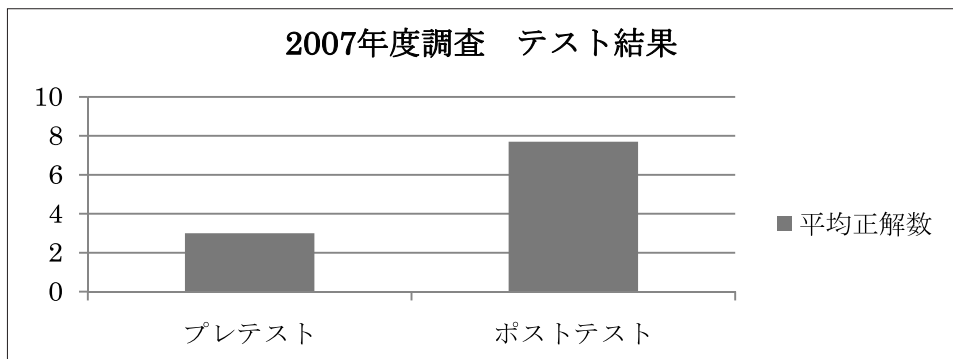
正解数	0問	1問	2問	3問	4問	5問	6問～
人数	0名	1名	4名	3名	2名	0名	2名

最高が6問正解、最低が1問正解、12名の対象者の平均は3.2問正解という結果が出た。

ポストテスト結果

正解数	～4問	5問	6問	7問	8問	9問	10問～
人数	0名	1名	3名	4名	2名	1名	1名

最高が10問正解、最低が5問正解、12名の対象者の平均は7.2問正解という結果が出た。



2. 2008年度におけるプレテスト, ポストテスト結果

プレテスト結果

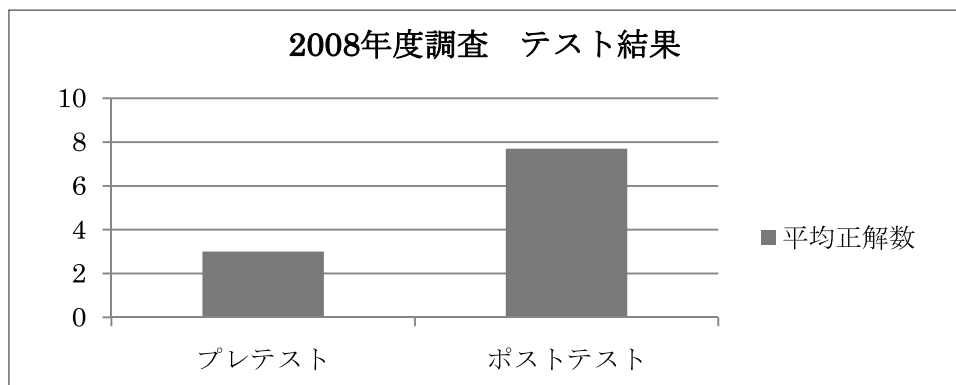
正解数	0問	1問	2問	3問	4問	5問	6問～
人数	0名	1名	3名	3名	4名	1名	0名

最高が5問正解, 最低が1問正解, 12名の対象者の平均は3.1問正解という結果が出た。

ポストテスト結果

正解数	～4問	5問	6問	7問	8問	9問	10問～
人数	0名	0名	4名	4名	4名	0名	0名

最高が8問正解, 最低が6問正解, 12名の対象者の平均は7問正解という結果が出た。



3. 2009年度におけるプレテスト、ポストテスト結果

プレテスト結果

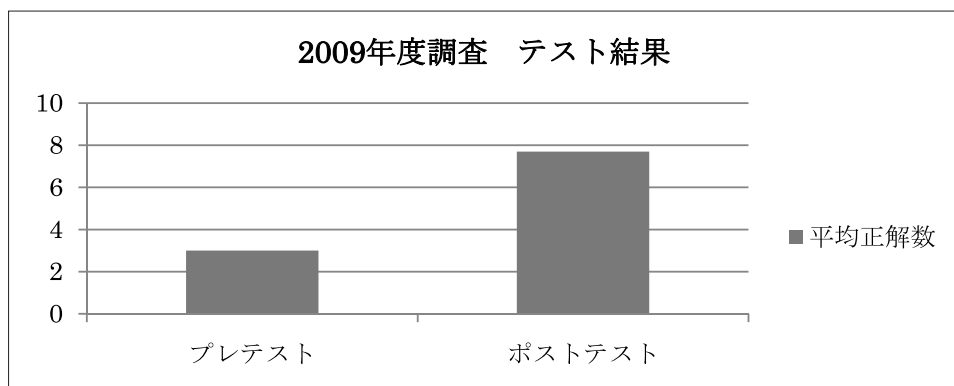
正解数	0問	1問	2問	3問	4問	5問	6問～
人数	1名	1名	1名	4名	4名	1名	0名

最高が5問正解，最低が無正解，12名の対象者の平均は3問正解という結果が出た。

ポストテスト結果

正解数	～4問	5問	6問	7問	8問	9問	10問～
人数	0名	0名	2名	3名	4名	3名	0名

最高が9問正解，最低が6問正解，12名の対象者の平均は7.7問正解という結果が出た。



4. 指導開始前ヒアリングおよび終了後アンケート調査、ヒアリング結果

プレテスト終了後，各グループに自由に感想や学習に対する抱負，不安等を話すヒアリングをおこない，対象者から主に下記の発言を得た。

・プレテストを受けた感想

「自分の実力のなさを改めて実感した。」

「単語がつながって聞こえるため理解できない。」

「特にリスニングのための勉強をしてこなかったことを後悔する。」

・学習に対する抱負，不安

「ネイティブが普通の早さで話しても聞き取れるようになりたい。」

「短期間では劇的向上は無理としても，ある程度は今よりきたい。」

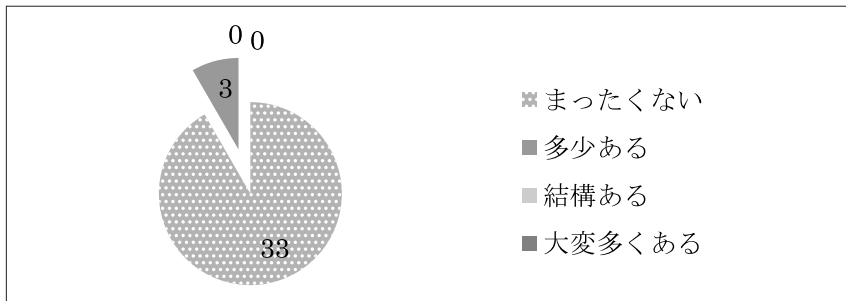
「自分が指導についていけるのか，プレテストを受けてみて心配だ。」

次に、各グループへの指導終了後におこなったアンケート調査結果を示す（有効回答者数は36名）。

指導後アンケート調査結果

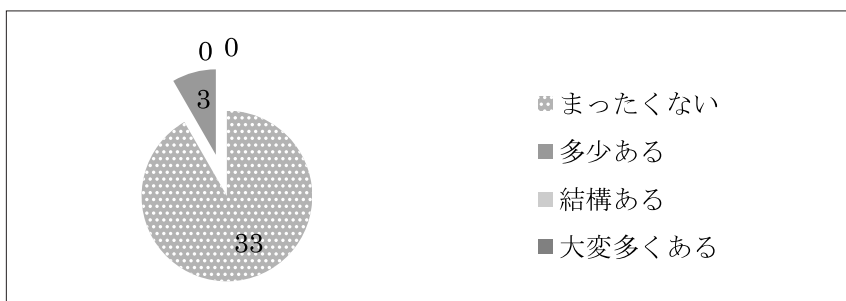
質問①これまでに中学・高校等の英語の授業で特にリスニング力を上げるための勉強法をおこなった経験はありますか。

- | | |
|--------------|-----|
| 1. 経験はまったくない | 0名 |
| 2. 経験は多少ある | 24名 |
| 3. 経験は結構ある | 12名 |
| 4. 経験は大変多くある | 0名 |



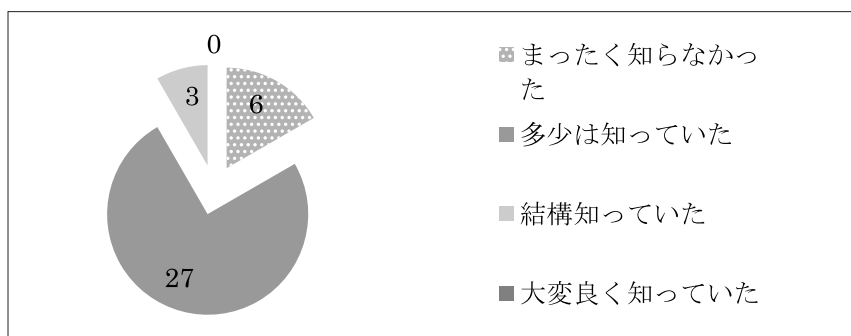
質問②これまでに中学・高校等の英語の授業で今回と同様に個人指導を受けた経験はありますか。

- | | |
|--------------|-----|
| 1. 経験はまったくない | 33名 |
| 2. 経験は多少ある | 3名 |
| 3. 経験は結構ある | 0名 |
| 4. 経験は大変多くある | 0名 |



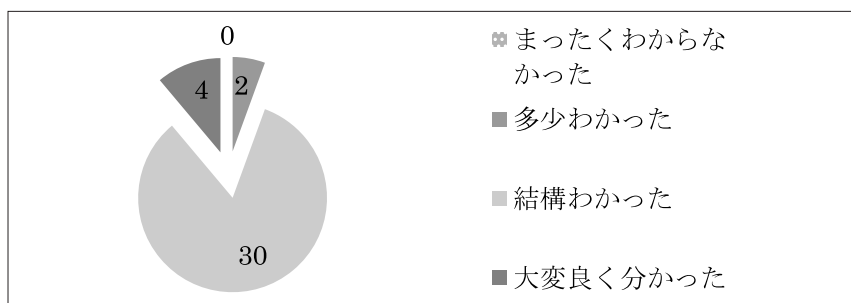
質問③英語の強勢・音変化等の法則を以前から知っていましたか。

- | | |
|---------------|-----|
| 1. まったく知らなかった | 6名 |
| 2. 多少は知っていた | 27名 |
| 3. 結構知っていた | 3名 |
| 4. 大変よく知っていた | 0名 |



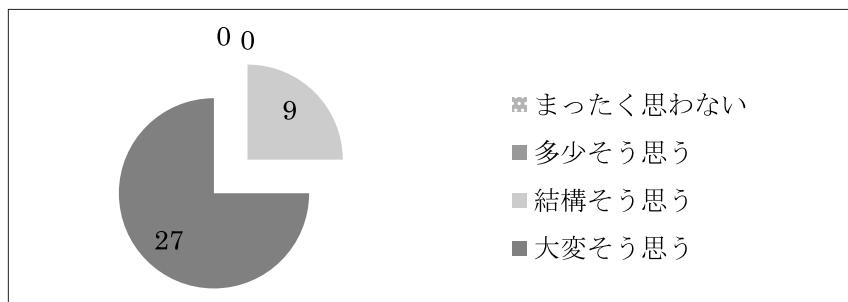
質問④今回の授業で、英語の強勢・音変化等の法則がわかりましたか。

- | | |
|----------------|-----|
| 1. まったくわからなかった | 0名 |
| 2. 多少わかった | 2名 |
| 3. 結構わかった | 30名 |
| 4. 大変よくわかった | 4名 |



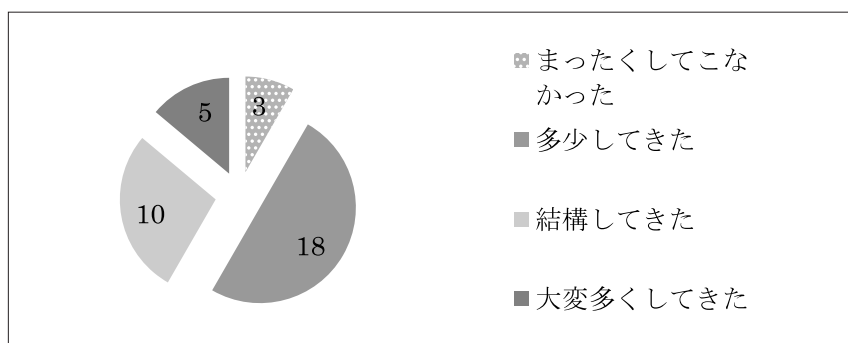
質問⑤今回と同様の勉強法を英語学習の早い段階でおこないたかったと思いますか。

- | | |
|-------------|-----|
| 1. まったく思わない | 0名 |
| 2. 多少そう思う | 0名 |
| 3. 結構そう思う | 9名 |
| 4. 大変そう思う | 27名 |



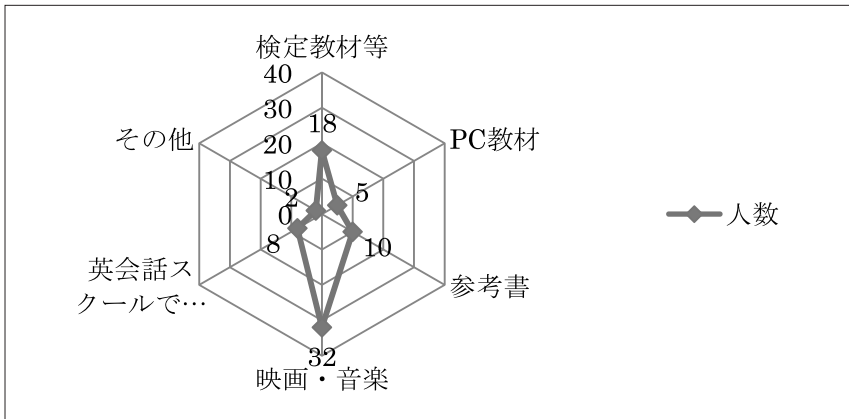
質問⑥これまで日常的に自学習としてリスニングの勉強をしてきましたか。

- | | |
|----------------|-----|
| 1. まったくしてこなかった | 3名 |
| 2. 多少してきた | 18名 |
| 3. 結構してきた | 10名 |
| 4. 大変多くしてきた | 5名 |



質問⑦それは主にどのような勉強法ですか（複数回答可）。

- | | |
|----------------------------|-----|
| 1. 英検・TOEIC などの検定のための教材で学ぶ | 18名 |
| 2. PC を使用する教材で学ぶ | 5名 |
| 3. リスニング用に書かれた参考書で学ぶ | 10名 |
| 4. 映画を観たり音楽を聴いたりして学ぶ | 32名 |
| 5. 英会話スクール等で会話を通して学ぶ | 8名 |
| 6. その他 | 2名 |

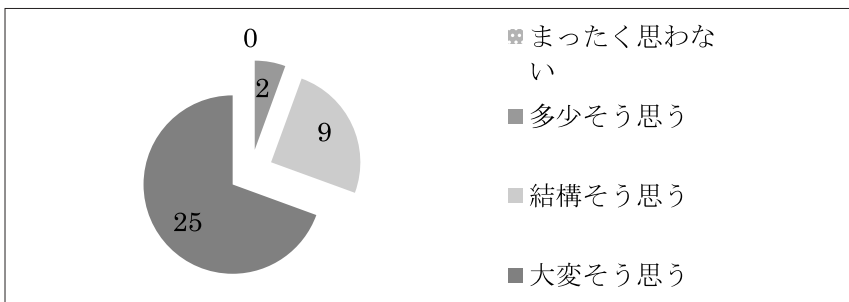


質問⑧前質問で「その他」と回答した方は具体例を挙げてください（回答者2名）。

「外国人の友人と会話する」と回答。 2名

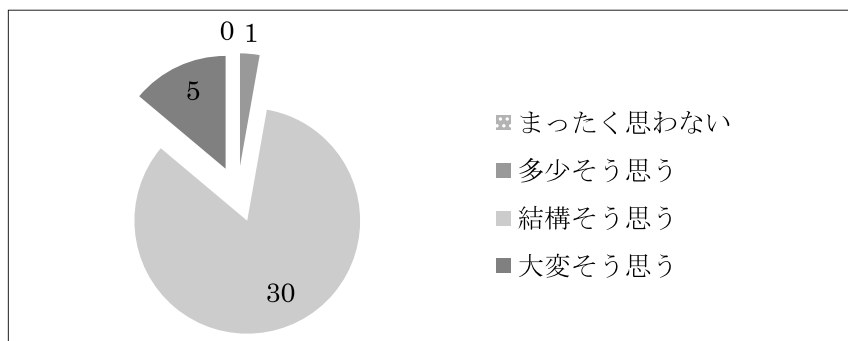
質問⑨今回おこなったリスニング力向上のための勉強が、あなたのスピーキング力向上（発音向上）にも役立ったと思いますか。

- | | |
|-------------|-----|
| 1. まったく思わない | 0名 |
| 2. 多少そう思う | 2名 |
| 3. 結構そう思う | 9名 |
| 4. 大変そう思う | 25名 |



質問⑩これからは自分で今回の勉強法をつづけていこうと思いますか。

- | | |
|-------------|-----|
| 1. まったく思わない | 0名 |
| 2. 多少そう思う | 1名 |
| 3. 結構そう思う | 30名 |
| 4. 大変そう思う | 5名 |



アンケート記入後に、各グループとも自由発言の機会を設け、ヒアリングをおこなったが、出された意見はおよそ下記のように分類される。

「週に1日だけ、わずか15分の時間で集中的に学べることは現実的で良い」

「自分一人だけを相手に指導してもらえるので、長所短所を教えてもらえる」

「毎日復習するのは大変かも知れないが、15分程度だったのでなんとかできた」

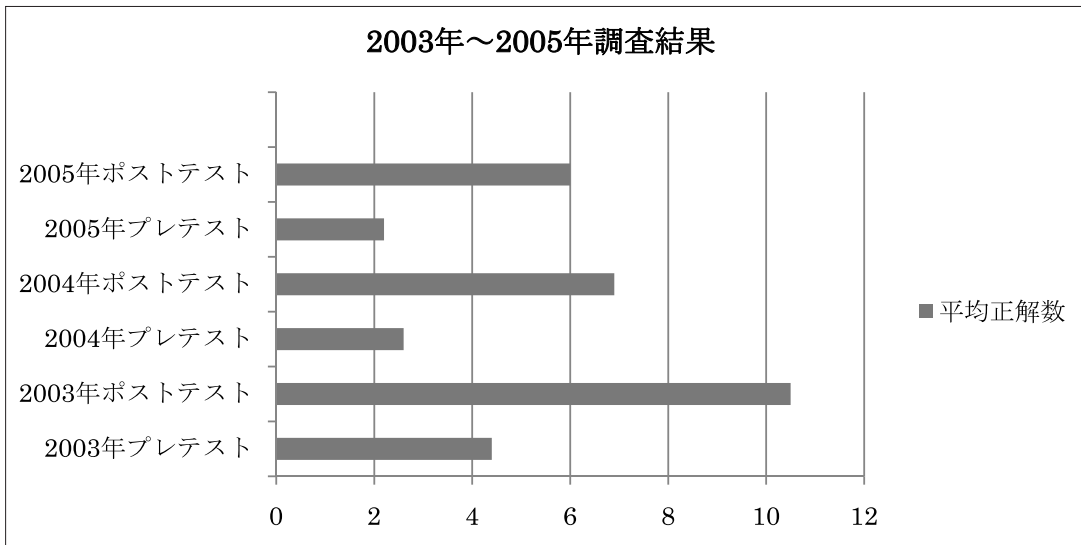
「楽しい映画が教材だったので感情移入ができてイントネーションを学びやすいと感じた」

これら3グループの対象者は皆、自ら募集に応じた学生だけあり、皆が意欲的に授業に臨んだ。ポストテスト結果、終了後アンケートおよびヒアリング調査結果からは対象者にとって有益な学習となったことが判断される。

Ⅳ 考察

筆者は、2003年、2004年、2005年と、本研究と同様にアクセント記号、リンキング記号、リデュース記号を用いてナチュラルスピードでの英語の音の聞こえ方を3種類に分類し、対象者が音変化を視覚的に理解する指導法によるリスニング力向上の調査をおこなった。その際のテスト内容、問題数は本研究のそれと同じである。

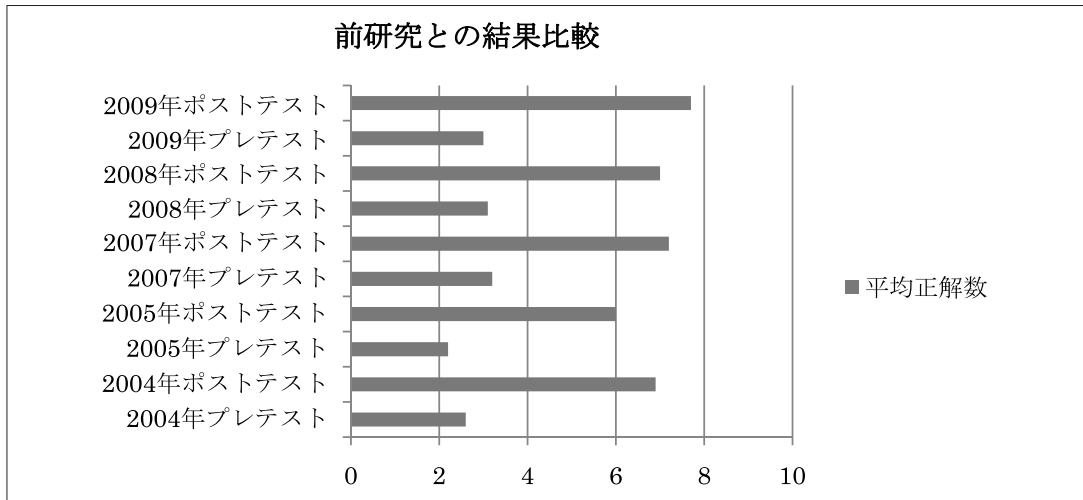
次に各グループのプレテスト、ポストテストの結果を示す。



まず2003年におこなった調査の対象者については、実践女子学園生涯学習センターが発行している2003年度秋期開講講座紹介パンフレットにより、筆者が担当を予定する「英会話Ⅱ」の受講を申し込んだ受講生10名であり、その内訳は、50歳代の専門職に就く女性2名、20歳代の会社員の女性2名、20歳代の大学生（女性）4名、20歳代の短期大学生（女性）、2名、20歳代の専門学校生（女性）1名であった。計6回にわたる調査を振り返ると、この実施グループが最も高い向上率（平均4.4問正解→平均10.5問正解）を得られたことには、他グループと異なる対象者の構成による。対象者を募った講座の内容については「受講生の『辞書を片手になんとか話してはみても、相手の言っていることが早くてわからない』の声に、とりわけリスニング力の向上に重点を置く」とし、金子光茂／リチャード・H・シンプソン（2001）著『英国滞在の英会話』（南雲堂）を教材に、パンフレット記載の講座紹介には、一定期間の英語学習経験を積んだ中級レベルの学習者を対象に、会話教材を用いながら集中的にリスニング学習をおこなう旨を記して「リスニングが苦手」を克服したい学習者を集めた。したがって、対象者のモチベーションは他グループに比較してかなり高く、自習を進ん

でおこなうことをいとわなかったことと、10名中3名は他7名より大幅な向上が見られ、平均正解数を引き上げたのだった。

では、2004年と2005年の調査結果と、本研究における結果を併せて示す。



2004年、2005年の調査対象は、本研究におけるそれと同大学同学部の学生であり、大きな英語力の差異、学習意欲の違いはあまり認められないといえるが、2005年の調査ではその対象者数が26名と他グループの2倍を超え、また実施形態は英語の総合力を延ばすようデザインされた大学の一般授業中、週30分の時間（実質指導時間およそ6時間）リスニングのために充てた点が大きな違いである。

では、対象者数が10名、本研究の同じく自ら進んでリスニング力向上のための集中補講授業に参加を申し込んだ学生たちのグループと比較する。同調査は2004年10月～11月、週1回、2時間授業×5回（計10時間）という形でおこなわれた。金子光茂／リチャード・H・シンプソン（2001）著『英国滞在の英会話』（南雲堂）を主教材とし、プラス a として、学生が任意で持ち寄った英語の童話（例として *The Tale of Peter Rabbit*）や日本の代表的昔話（例として *Momotaro, the Peach Boy* や *The Bamboo-cutter's Tale* 等）を、それぞれ皆の前で音変化に注意しながら朗読するという学習の要素を取り入れた。同調査と本研究の相違点は、①グループ指導と個人指導、②週1回、2時間授業×5回（計10時間）と週1回、15分指導×10回（計150分＝2時間半）という対象者の時間的負担、③前者では英会話テキスト、後者では映画を教材に用いたことの3点が挙げられる。

前者の平均正解数はプレテストで2.6問、ポストテストで6.9問、後者の平均正解数はプレテストで3.1問、ポストテストで7.3問であり、その伸び率に特段の変化は認められない。しかしながら対象者に掛かる時間的負担に目を向けると、後者においては軽

減されているとあってよい。今般の社会情勢に照らし、一般的英語学習者（本研究においては大学生）が日常生活のなかで英語学習に多くの時間を割くことは非常に難しい。大学及び専門学校等の英語科に在籍し、英語学習を毎日の主な課題とする学生は別として、他科目の勉強、アルバイト、部活動、友人との交流等々、昨今の学生はことのほか多忙である。そうした環境にあって、ことさら英語習得が義務ではない学生にとって、5週間であるにせよ、2時間の拘束に比べて、週一回15分指導の后者は手を出しやすい。しかも個人指導であることで対象者自身が理解できていない点を即座に明確に指摘され、その分の時間のロスが発生しない。前述のアンケート調査結果からも明らかなように、学習者の多くはリスニングに関して質的にも量的にも十分な学習をしてきているとは言い難く、日頃から自学習に努めているとはいっても、参考書の問題を解いたり、映画を観たり、音楽を聞き流したりするという回答が目立つ。いずれも有効な手段ではあるが、理解しにくいままもっぱら字幕に頼って映画のストーリーを追ったり、好みの曲をBGMとして流したり、また、不正解問題は解答ページを確認してすぐさま次の問題へ進む、の繰り返しでは、英語の音に慣れはしても「聞ける」ようになるまでにかかる時間を想像しにくい。本研究の目的は、先に示したように慌ただしい日常生活のなかで英語学習のために多くの時間を割くことができない一般的学習者が、より高い英語力を目指す動機付けとなり得る程度の満足度の高い成果を、彼らが学習意欲を高く保持できる程度の短期間で上げることである。その意味で、前研究と比較し、その目的を果たしたといえる。加えて、アンケート中、「質問⑨今回おこなったリスニング力向上のための勉強が、あなたのスピーキング力向上（発音向上）にも役立ったと思いますか。」に対し、「大変そう思う」と答えた対象者が25名、「結構そう思う」が9名、「多少そう思う」が2名と、また、本研究では3カ年とも映画という視覚的（娯乐的）サポートが学生のモチベーション維持、さらに向上につながると考え、作品の選定にあたっては、学生の希望を取り入れ、明朗な楽しい仕上がりの作品を条件とし、リスニング学習に好意的感情が向けられるよう努めた。英語学習全体について肯定的、積極的態度が持続されることは、継続的自学習を必要とする語学学習にとって欠かせない要素である。アンケート結果でも、この試みは評価を受けている。ある表現が、どのような場面で、どのような表情、声の調子で話されているかを知って発音する練習法が肝要である。ただ、3作品ともにアメリカ映画であったことは、英語の今日的立場から判断するに今後の改善が検討される。多様な英語のあり方を無視することはできない。

さて、筆者にとって、いかに英語学習の垣根を低くし、継続的な学習を可能にできるかが、指導する側の立場にある筆者にとっての大きな課題である。もとより語学の習得は長時間の学習を要し、一定の能力を得た後も保持のために継続的に学ばねばならない。残念ながら一般の大学生には高いハードルである。

おわりに

本研究は、一般的学習者が学習意欲を高く保持できる程度のなるべく短かい期間で、より高い英語力を目指す動機付けとなり得る程度の満足度の高いリスニング力向上の成果を上げることが目的とし、2007年、2008年、2009年に実施した。短い指導時間ではあっても、次回指導まで一定の後習時間を設け、目標とする発音レベルの到達を目指してナチュラル・スピードにおける英語の音変化を理解し、長年のカタカナ英語習慣からの脱却、脳の排他作用との決別をはかるべくおこなわれた。各実施グループとも計150分の短い直接指導時間にもかかわらず、簡略化した3種類の記号を用い、学習者の理解を視覚的に促そうとする指導により、これまで述べたように一定の良好な教育成果が上げられた。反面、どのグループも等しく正解数は全20問には遠く及ばず、また各グループのアンケート調査結果を見る限り、実施前の対象者の音変化に関する知識はきわめて浅く、この指導を通じてほぼ初めて知ったというケースが多い。ちなみに、アンケート項目中、「質問③英語の強勢・音変化等の法則を以前から知っていましたか」に対して「結構知っていた」と答えた5名は、以前に筆者担当の英語科目授業で学んでいたケースである。

テスト問題に使われる単語はごく平易なものであるが、それでも一般学習者には聞き取りは難しい。今後の研究課題として、個人指導をより長期にわたっていかに実現できるかが模索される。

引用文献

- (1) 「ラブ・イン・ローマ」(2002年、アメリカ映画)(ワーナー・ホーム・ビデオ)

参考文献

- (1) 今井邦彦, 外池滋生 (2007) 『英語徹底口練』(実務教育出版)
- (2) 鶴田豊 (2005) 『英語のリスニングは発音力で決まる』(ジャパントイムズ)
- (3) Buck, G. (2001) *Assessing listening*. Cambridge University Press.
- (4) Cheshire, J. ed. (1991) *English Around the World*. Cambridge University Press.
- (5) Dornyei, Z. (2001) *Teaching and researching motivation*. Longman.
- (6) Paul, D. (1998) False Assumption in the Japanese Classroom. *The Language Teacher* 22:7

